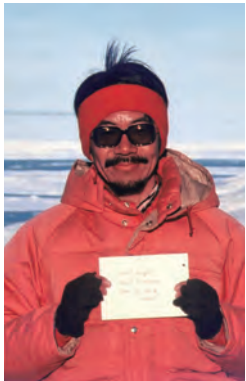


# フィールドノートの向こう側

## — ナチュラリスト 青柳昌宏の軌跡 —

企画展「自然史アーカイブズをひらく」(2026/2/21-5/10)で展示した「ロンボク海峡通過時の野帳」。揺れる船上で描かれたとは思えない緻密なスケッチと整った文字は、いかにして培われたのでしょうか。

本ミニ企画展では、この一冊のノートを起点に、青柳昌宏の類まれな観察眼と「自然の驚異を誰かに伝えたい」という情熱の軌跡を、実物資料から読み解きます。



### 青柳 昌宏

あおやなぎ まさひろ / 1934 - 1998

生物学者、教育者。昆虫学や生態学を修めたのち、教育の現場で独自の自然観察手法を実践。南極でのペンギン研究、盲学校での「触察教材」の開発、自然保護活動(NGO 設立)など、多岐にわたる活動を展開した。五感をフルに使うことで自然と対峙し、そこで得た感動を「記録」として他者へ伝え、教育に還元することに、情熱を注いだ。

- 1934年 東京生まれ。戦時中に和歌山へ疎開し、豊かな自然の中で観察眼を養う。高校時代は生物クラブでガリ版刷り雑誌を発行。
- 1953年 東京教育大学に入学。農学部・理学部で応用昆虫学と動物生態学を学ぶ。卒業後は和歌山で教職に就く。
- 1970年 東京教育大学附属盲学校に赴任。「触って学ぶ生物教材」などを開発、のちに誰もが五感で自然を楽しむ「ネイチャー・フィーリング」を提唱。
- 1971年 第13次日本南極地域観測隊に参加。航海中にロンボク海峡を通過。
- 1978年 ニュージーランド南極地域観測隊に参加。ペンギンのヒナが音声で親を識別していることを実証。
- 1981年 南極から家族に宛てた手紙をもとに『ペンギン-南極からの手紙』(平凡社)を出版。
- 1986年 NGO「ペンギン基金」を設立、初代代表に。
- 1998年 逝去(享年63歳)。

## 1. 美しいノートの秘密 — 「伝える」ための記録術 —

青柳昌宏の野帳を開くと、揺れる船上で描かれたとは思えないほど緻密なスケッチと整った文字が目に入ります。こうした記録の技術はどのようにして培われたのでしょうか。一人のナチュラリストが残した記録が、多様な形へと姿を変え、社会にひらかれていく軌跡をたどります。

### ■ 徹底した観察眼

高校2年時の観察記録は、すでに学术论文の体裁を整え、対象を徹底的に視る姿勢が表れています。

### ■ 鉄筆が育てた文字

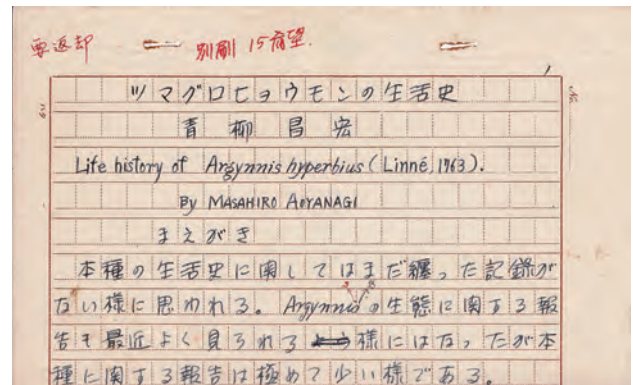
なぜ、青柳の文字は読みやすいのか。高校時代、自ら鉄筆でロウ紙を削った「ガリ版印刷」の経験。「他人に読ませる文字を、身体に刻み込む」経験が、あの筆跡を生んだのかもしれませんが。



『ツマグロヒョウモンの生活史』原図(未完)

[スケッチ(未完原図) 1951年 / 内田啓子氏所蔵]

中学時代から観察を続けたツマグロヒョウモンについて、『紀州生物』への投稿に向け描いたスケッチ。幼虫の細部を点で描き込む過程がわかる。のちに南極のペンギンや風景を正確に記録することになる青柳の並外れた観察眼と描写力の原点がここにある。



『ツマグロヒョウモンの生活史』自筆原稿

[手書き原稿] 1951年 / 内田啓子氏所蔵

同論文の投稿原稿。読みやすい字だが、ガリ版印刷や後の野帳に見られるようなカッチリとした文字とは異なり、まだ丸みを帯びた筆跡である点が興味深い。



会報『粉高生物』第3号（ガリ版刷り）

【印刷物】1952年 / 内田啓子氏所蔵

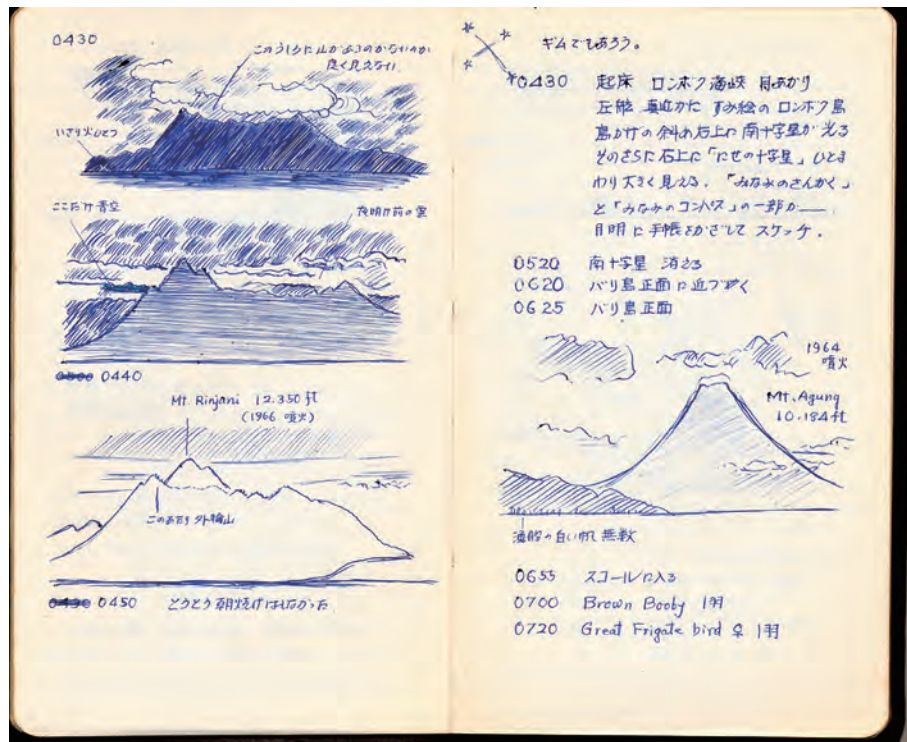
高校の生物クラブ会報。大半のページは青柳が自ら鉄筆を握り、ロウ紙を削って「ガリを切った」ものである。線が整った読みやすい文字。「他人に読ませるための文字を身体に刻む」この経験が、後の美しい筆跡を培ったのだろう。

## 2. 現場の熱を、伝える形へ — ロンボク海峡の夜明け —

### ■ 1971年12月5日 04:30、暗闇での誓い

「生物学徒たるもの、いちどは船で通ってみたいウォーレスゆかりのロンボク海峡。フルにその通過を体験することこそ、得がたき幸せであり、ギム（義務）でもあろう。」

第13次南極地域観測隊に参加した青柳は、航海中にインドネシアのバリ島 - ロンボク島間を通過します。アジアとオーストラリアの生物相を分ける境界線が通るロンボク海峡。夜明け前から10分刻みで変化する山の稜線を捉えたスケッチには、五感をフルに使って自然と対峙する「生の熱量」が閉じ込められています。



### ロンボク海峡通過時の記録 — 青柳昌宏の野帳

【野帳】1971年12月5日 / 内田啓子氏所蔵

第13次南極地域観測隊として向かう船上で書かれた記録。場所は生物地理学の聖地「ロンボク海峡」。まだ暗い朝4時半から、刻々と変わる島の稜線を10分おきにスケッチしている。前ページには「生物学徒たるもの……その通過を体験することこそ、」とあり、「ギム（義務）でもあろう」と続く。カタカナで書かれた「ギム」の文字からは、科学者としての使命感と、旅するナチュラリストの純粋な喜びが伝わってくる。

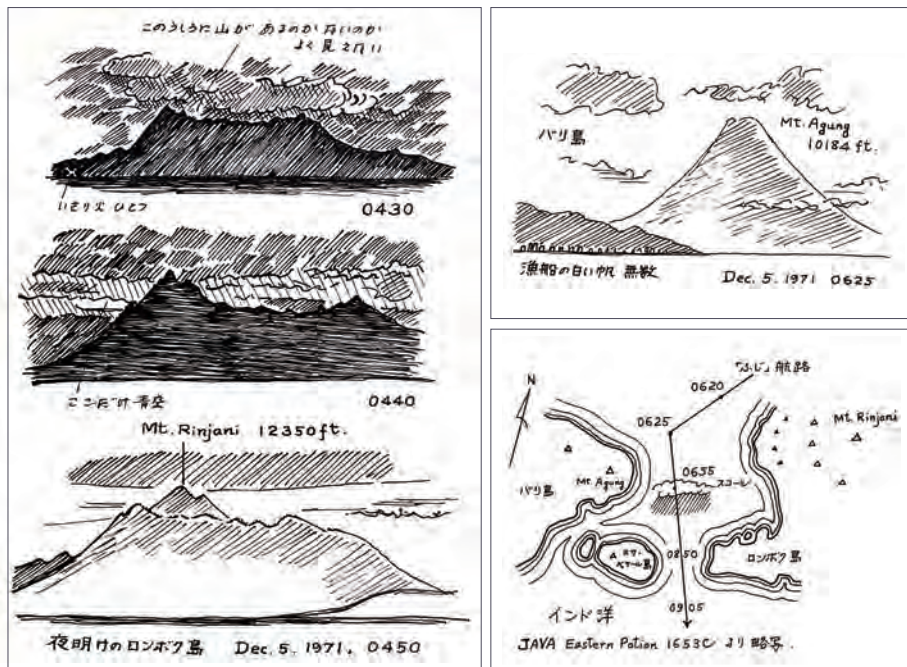
### ■ トレースという「翻訳」

この感動は、のちに雑誌記事として世に出ます。「トレース原図」は、野帳を下敷きに、読者へ正確に伝わるよう線を整理したものです。見比べてみてください。個人の「体験」が、社会の「知識」へと翻訳される、その中間のプロセスがここにあります。

### 『生物教育』投稿時のトレース原図

【投稿原図】1977年頃 / 内田啓子氏所蔵

青柳はその後、観測船「ふじ」の甲板に5時間立ち、体験したロンボク海峡通過の様子を雑誌に投稿した。投稿の図は野帳のスケッチを下敷きにして清書されている。揺れる船上で描かれた野帳のスケッチが、すでに原図としてそのまま使えるほどの、恐るべき完成度を持っていたことがわかる。



# 3. 家族への便りは、世界への報告書だった — 南極からの手紙 —

## ■ 1971年：手紙という名の“最初の報告書”

極寒の地から家族宛てに綴られた、愛情あふれる手紙の数々。

第13次南極地域観測隊。遠く離れた家族に宛てた手紙は、ガリ版を彷彿とさせる読みやすい文字と、わかりやすいイラスト（トレースではなく描きなおし）であふれています。

「家族に自分の体験を分かりやすく伝えたい」という純粋な愛情が、結果として専門家をも唸らせる質の高い記録を生み出しました。展示している手紙の図版と、後の書籍『ペンギン—南極からの手紙』を見比べてみてください。私的な記録が、社会の共有財産へと越境していく原点がここにあります。

### 家族宛書簡と封筒（1971年）

【書簡】1971年 / 内田啓子氏所蔵

第13次南極地域観測隊に参加している間に家族宛てにしたためられた手紙。何通にも及ぶ手紙は、単なる安否確認ではなく、遠く離れた家族に自分の体験を分かりやすく伝えようとする、愛情あふれる「南極レポート」であった。奥様、お嬢様、そして息子さん向けと3パターンの私信は、その後の幅広い情報発信につながった基礎と思える。



## ■ 1978年：爆音の中で走るペン

後年のニュージーランド隊での調査の中で、青柳はこう述べています。「ヘリコプターの爆音が聞こえはじめた時、大急ぎで小屋にもどって手紙をかきはじめるのだった」。

推敲する暇もなく急ぎ書いたはずの文章が、これほどまでに整っているのはなぜでしょうか。それは、五感をフルに使った観察体験を野帳に記録する段階で、すでに青柳の頭の中で「伝えるための構成」が完璧に出来上がっていたからなのでしょう。



### 家族宛書簡 南極ロス島ケープバードより 第3信（1978年）

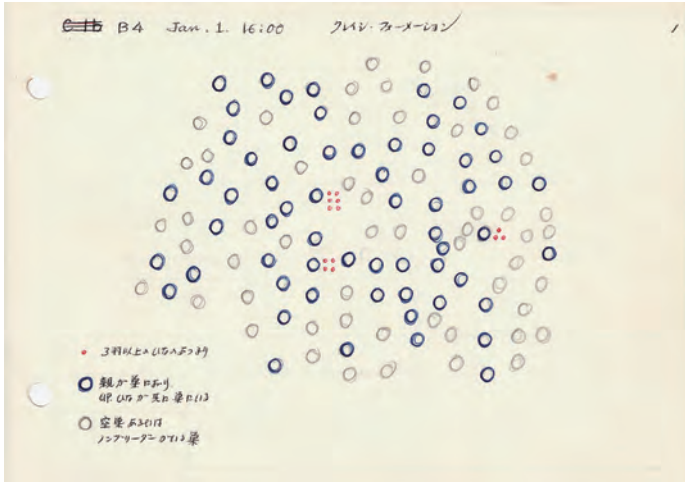
【書簡】1978年 / 内田啓子氏所蔵

1978年のニュージーランド隊に参加した際の手紙。アデリーペンギンがルッカリー（ココニー）でテリトリーを作り始めた様子が記されている。私的な手紙の中に、現場の全景を捉えるペンギンたちへの科学者の眼差しが見えてくる。

## 4. 子どもたちへのプレゼント — 科学という名の交流 —

### ■ 闘う記録：調査カード

ペンギンは繁殖の過程で一時期、ヒナだけで構成される集団クレイシ（共同保育所）をつくります。青柳は、クレイシにいるヒナと、給餌のためクレイシに戻ってきた親が、見失うことの無いように音声によって確認しあっていることを証明しました。展示している調査カードは、仮説を実証するために現場で記録した「生データ」です。人に見せるものではなく、自分のデータ集積のための文字。その記録が真理を導き出しました。



### 調査カード

【フィールドノート】1978年～1979年 / 内田啓子氏所蔵

アデリーペンギンのルッカリー（コロニー）の様子を記録したB6判の情報カード。クレイシ（共同保育所）の形成や、ヒナが親の声を識別するという仮説を実証するために現場で格闘した生データである。他者に見せるためではない、自分だけの研究記録としてのラフな筆致が現場の熱を伝える。

### ■ 研究プロセスをそのまま手渡す

「私は研究を本務とする人間ではなく、学校で生物を教えている人間です」。

児童書『ペンギンの国』には、観察から仮説、実験、証明に至る「研究のプロセス」そのものが、やさしい言葉で詰め込まれています。それはまさに、子どもたちへの最高の「プレゼント」でした。

一冊のノート、一枚のスケッチ、一通の手紙。青柳昌宏が現場で刻んだ個人の記録は、形を変え、社会の共有財産へと育っていきました。一つの記録が次世代の「知」へと繋がっていくこの軌跡は、私たちがなぜアーカイブズを残し、未来へひらいていくべきなのか、その確かな理由を教えてください。

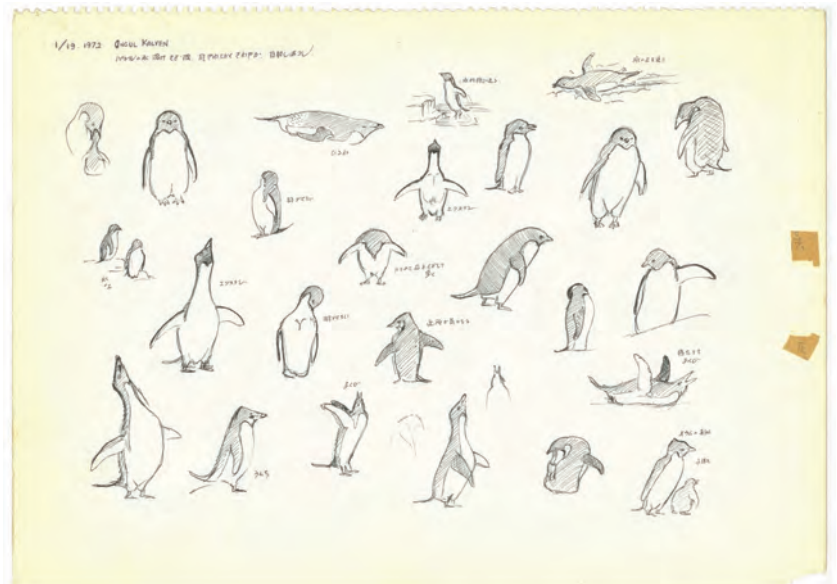


『ペンギンの国』(平凡社,1984年)

### アデリーペンギンのスケッチ

【スケッチ】1972年 / 内田啓子氏所蔵

スケッチブックに残されたペンギンのさまざまな姿。愛らしい仕草の中に、骨格や筋肉の動きを正確に捉える研究者の眼差しが光る。これらのスケッチが、手紙を彩り、後の書籍や論文の土台となった。



本冊子は、神奈川県立生命の星・地球博物館の企画展「自然史アーカイブズをひらく」（2026年2月21日～5月10日）の関連展示として開催した、ミニ企画展「フィールドノートの向こう側 — ナチュラリスト青柳昌宏の軌跡 —」（2026年4月29日～7月12日）の内容を主な出品資料で再構成したものです。本展示の企画、資料提供にあたり、多大なご協力を賜りました内田啓子氏に深く感謝申し上げます。本展示および本冊子の作成は、JSPS科研費（JP24K04395）の助成を受けたものです。

### ミニ企画展示「フィールドノートの向こう側 — ナチュラリスト青柳昌宏の軌跡 —」展示資料

2026年6月26日発行

発行：神奈川県立生命の星・地球博物館

企画・編集：大坪 奏・田口公則 協力：内田啓子

※ 本書の全部または一部を、無断にて転載・複製することを禁じます。

